世界の幸せをカタチにする。
Creating Peace & Happiness for the World
Musashino University
武蔵野大学 学術機関リポジトリ
Musashino University Academic Institutional Repository

# Marjorie Kinnan Rawlings 原作 ――映画 The Yearling 制作の頃



| メタデータ | 言語: Japanese |
| --- | --- |
| | 出版者: |
| | 公開日: 2017-05-18 |
| | キーワード (Ja): |
| | キーワード (En): |
| | 作成者: 佐藤, 晴雄 |
| | メールアドレス: |
| | 所属: |
| URL | https://mu.repo.nii.ac.jp/records/502 |

矢崎正夫教授古希記念論文

# Marjorie Kinnan Rawlings 原作
# ――映画 The Yearling 制作の頃

## Film Production of Marjorie Kinnan Rawlings' *The Yearling*

佐　藤　晴　雄*
SATO Haruo

## はじめに

これから何回か、戦前に活躍した米国女流作家Marjorie Kinnan Rawlingsについて小論を書くつもりだが、今回は代表作*The Yearling*（1938）の映画版を取りあげる。もっと早くに着手するつもりでいたが女子大時代から三十年近く所属した武蔵野(女子)大学英語・英米文学科が時代の荒波に抗せず閉じるやら、新設の教育学部に移籍するやらで身辺雑々としていた。英米文学科さいごの二年間は江東区有明の新校舎で行なわれた。3、4年生合同の「英米文学･文化ゼミナール」では、以前から思うところがあったが、方言文法のやっかいさからためらっていた米南部小説*The Yearling*を、二年間でやっと半分足らずだが演読できたのは幸いであった。ただ、周囲茫漠とした埋立地の新校舎で、作中に'coon（アライグマ）が出てきたとき、――そういえばキャンパスに棲込みのタヌキは見ました？ ツガイなんだけれど。Magnolia――ああ、四号館前に三本ぐらいある大木の、和名が泰山木という夏におおきな白い花を咲かせるやつ、ミシシッピ州の州花になっている――、などという雑談は空転した。最終の一学年などは、武蔵野キャンパスにはほとんど通学しなかったのだから致し方ない。

*The Yearling*という、いささかヘンテコなアメリカ小説の原題名が脳裏に付着したのは、昭和57年か58年ごろだった。中央大学文学部英文専攻の恩師、故藤井健三教授が方言の文法書『文学作品に見るアメリカ南部方言の語法』(1984)の刊行準備中に、大学院生だったわたしは、校正のお手伝いをさせていただく機会があった。引用文とその出典にひんぱんに*YRL*すなわち*The Yearling*が出てきたとき、文法書の例文だから切れ切れだが、例文の内容から、ああこれはあの子鹿物語だと直感した。あの子鹿物語――そう思ったのは、とおい昔こども向けのなにかしらを読んだからかも知れない。懐しさとともに、ゲラの方々にでてくる米国南部方言の破格さ・奔放さが興味ぶかかった。しかし当時、北フロリダの人びとのことばの中に、英国やアイルランドの古い時代のことばが宿っていることを、藤井教授が著作の眼目の一つとして力説して居られることには、学者のカエルの卵ていどのわたしの注意はあまり向かなかった。託されたしごとは校正であって、言語の歴史的考証ではないから、その意味では責務を忠実にやりおおせたのではあるが。

*武蔵野大学教育学部

## フロリダ林中に

米国の文芸出版Charles Scribner's社副社長で、作家の発掘・育成で夙に有名な編集主幹Maxwell Perkinsに励まされ、Marjorie Kinnan RawlingsがThe Yearlingの着想を得たのは1936年だった。元々、近所のこどもに読んできかせるぐらいに、こどもの頃からおはなし作りが好きだったという。ワシントンD.C.生れのRawlingsは、ウィスコンシン大学英文科を出て翌1919年、23歳で結婚する。現在のミドルネームKinnanが旧姓で、アイルランドあるいはケルトの血脈を思わせるが定かではない。"Songs of the Housewife"（主婦の唄）という詩をRochester（NY州）で発行するTimes-Union紙に書くようになり、ハウスワイフを称讃するはじめての新聞コラムニスト、などとささやかな注目を受けた(1)。しかしScott Fitzgeraldなどが高額原稿料をもらっていたSaturday Evening PostとかVanity Fairのような'Slick Magazine'（高級大衆雑誌）に売り込んでもまったく相手にしてもらえない、孵化まえの卵状態がつづく。生来（うまれつき）都会ぐらしを好まないRawlingsは、1928年、フロリダ半島の北部中央の亜熱帯林に農園を購入して住うようになる。はたしてそこには、Rawlingsの作家本能の火を掻き起こすものが充満していたようだ。19世紀末、気鋭の少壮歴史家Frederick Jackson Turnerが、「辺境は消滅した」と断じたのは1893年である。辺境（frontier）とは開拓地と未開拓地の境界地域を指し、辺境線・開拓前線（frontier line）は西へ西へと移動して「消滅」した。frontierということが、self-reliance, independence, free enterpriseなどのアメリカ独自の文化尺度というか規範に、おおきな影響をあたえた。さらにこの＜フロンティア学説＞は、アポロ計画推進の際の＜宇宙空間のフロンティア＞とかJohn F. Kennedyが大統領選挙のとき＜ニューフロンティア＞をスローガンに掲げたり(2)、生活の中心が森をはなれて都会に移っても国民のあいだに膨張した。後者など、本邦『広辞苑』などにあたるRandom House Dictionary of the English Language（2nd. ed.）にも収録されているぐらいだ。Rawlingsがフロリダ林間をねぐらにし始めたのは1928年だが、Turnerの「辺境消滅」宣言から20年以上経ても、フロリダ僻村のscrubとよばれる林間や沼沢地には、アメリカの辺境が息づいていた。たんに未踏の自然が残っているのではない。Rawlingsが選んだCross Creekには、Crackersとよばれる野人（白人）が居て、その倚風というか、辺境の質素で厳しい暮らしぶり、後進ぶり、ひなびた身ぶり口ぶりが美しく、Rawlingsはすっかり虜（とりこ）になったという。作家としての多産な十数年が始まるのもその頃からである。この地は故郷ではないが、Faulknerとミシシッピ州、Carson McCullersとジョージア州、『土』の長塚節と茨城常総地方などの関係に近い、大地にひっ付いた人間群像を紡ぎだすことになる。

最初にあちこちの雑誌に売り込んだのはスケッチ集で、"Cracker Chidlings"という。題名からして風変りで、G. A.（General American、中西部から西部にかけての地域的特徴が均一な一般米語）とか都会の文明生活の洗練とは趣を異にする、フロリダ林間の言語や生活が充満している。副題は「フロリダ内陸の実話集」で、「蛇だって」とか「ドブロク屋の女房」など5篇の「実話」が入っている。「ドブロク屋の女房」は'A 'Shiner's Wife'で、'Shinerとはmoonshiner。これは『アメリカ方言辞典』（*DARE*）が、「不法蒸留酒の意味でmoonshineは口語で広く用いられる」（*Moonshine* in the sense "illicitly distilled liquor" is now widespread in colloq use.）とかWebster第3版（*Webster's Third New International Dictionary*）が「火酒、特に密造のコー

ンウィスキー」（intoxicating liquor; *esp*: illegally distilled corn whiskey.）と説明する米国版ドブロクである。後者の辞典には――、‘charged with profession of moonshine――Tallahassee (Fla.) *Democrat*.’（密造で告訴された）というフロリダ地方紙からの引用が付いている。「ドブロク屋の女房」は、ドブロク屋のティムが芋畑でも見せるみたいに蒸留所を見せてやるぞとか、ボロ車（flivver）――語源不明だが*A Glossary of Faulkner's South*が‘a contemptuous term for a small, cheap car.’と説明するボロ車で、密造装置一式をばれないように移動するはなしなどが出てくる。‘flivver’は、わが国ならダイハツ・ミゼットかオート三輪など想像され、往時のフロリダ独特のコトバや田舎ぶりが懐しみを増す。

“Cracker Chidlings”――つまり「いなか白人モツ煮込み」―― 一時代まえのEdith Whartonなどの洗練された筆致からはかけ離れた、女流駆けだし作家のこんな題名の小品の雑誌掲載を受諾したのが、19世紀後半から文芸出版にまい進するScribner's社である。しかし当時、米国自体がなおもヨーロッパの辺境で、洋服は英国仕立てでなければ、ことばは英国基準のR. P.（Received Pronunciation）、つまりオクスフォード・アクセントでなければといった伝統社会の中にある。そこから脱却脱皮できなくて人生の真味をつかめないでいる――若者のおかれたこうした状況を当時気鋭の評論家Malcolm Cowleyが‘deracinated’（浮き草のような）と言ったのはよく知られている(3)。Rawlingsは、いま亜熱帯林の人びとの中にまぎれ込んで、森や湖沼の生命と表裏のところに暮らし、そこに文学の新境地を拓きかけている。そこをHemingwayやT. Wolfeを発掘したM. Perkinsの編集者魂が嗅ぎつけた。

たぶん押しかけたRawlingsが、泊り込んで起居を共にしたフロリダ在の‘cracker’とはどんな人びとか？ *DARE*を見ると、‘A backwoodsman, rustic, countrified person; a poor white person’――とあって、まあ、いなか貧乏白人のことである。同辞典によると、方言で「自慢する、ほらを吹く」の動詞‘crack’から来るという説もあれば、‘A poor White farmer; a rustic――often used to refer to a person from a specific state’を表す‘corncracker’から来るという説もある、としている。後者の説であがっている例文（1938年）‘*Hog and hominy* was considered fit food for *Corn-crackers*, the poor whites of Florida, Georgia, Kentucky, and Tennessee.’（豚とひき割りとうもろこしはかつて、コーンクラッカーズの連中、つまりフロリダ、ジョージア、ケンタッキー、テネシーの貧乏白人におあつらえ向きの食べ物と考えられていた）で感じがつかめるのではないだろうか。また*Webster*第２版も、‘one of the lower class of white population of the southern United States, esp. of Georgia and Florida, inhabiting the hills and backwoods; ― a nickname.’とほぼ同様の説明である。

“Cracker Chidlings”の‘chidlings’は‘chitterlings’で、食用にする豚などの小腸――まあモツのことである。*DARE*によるとしばしばスペルは‘chitlins’となる。1931年の例文として、‘*Scribner's Mag*. 89. 127 **FL**, *Cracker Chidlings By Marjorie Kinnan Rawlings* Real Tales from the Florida Interior.’と、この小篇の題名があがっている。

所かわって19世紀イングランド南部を舞台にしたThomas Hardyの現代古典*Tess of the D'Urbervilles*のヒロイン・テスのしがない父親は、ある夕刻、祖先が貴族だった故事を知らされると、こりゃ棚からぼた餅が降ってくるわいと浮かれて、通りがかりの若者に言伝を頼む。―― ‘Tell 'em at hwome that I should like for supper, ――well, lamb's fry if they can get it;

and if they can't, black-pot; and if they can't get that, well, chitterlings will do.'（家人にお膳の希望を伝えてくれ。子羊のオイル焼き、がなければブラックプディングか、そいつも無理ならチタリングでいい。）（Chap.1、拙訳）かわたれ時（彼誰時）というのは、アイルランドや出雲でなくても妖精や鬼が人に悪さをして頭がイカれるのかも知れない。この場面が序章の後尾にあって、チタリングとはいったい何かと怪しんだ読者はわたしだけであろうか。黒人作家Richard Rightからの例文を引いた方言学者R. I.マクデイヴィッドJr.の『アメリカの方言』（長井善見 訳編）には、伝統的なアメリカ黒人のSoul foodだという説明がある[(4)]。要するに臓モツ料理で、わたしの食欲をそそりそうもないので、米国滞在のおり探したこともないが、スーパーなどにふつうに売っているようだ。英語方言辞典*EDD*（*The English Dialect Dictionary*）には、地域別の様ざまな発音を反映したスペルが示され、'Chitterlings, after being thoroughly cleansed, are prepared for table by boiling them——the smaller ones being plaited together——and cutting them into short lengths. Served up thus, or else fried, they are eaten with mustard and vinegar, and are considered quite a delicacy of farm-house or cottage fare.'（じゅうぶんに水洗いしたものを茹でて食卓に供する——ほそいものは編んでからみじかく切りそろえる。または炒めてから辛子と酢でいただく。チタリングズは農家の珍味と考えられている）と解説してある。また、*Tess of the D'Urbervilles*の1974年Macmillan版後註には、'The small intestine of a pig; sometimes fried with stuffing.'（中に詰めものをして油で焼いたりする）という料理法がでている。さいごに、Hardy研究の第一人者、故大澤衛訳の『ダーバァヴィル家のテス』＜デュエット版世界文学全集38＞（集英社、昭和44年）では、「家のものに伝えてくれねえか、晩飯には、手にはいるなら、こうっと、子羊のフライ、それがだめなら黒腸詰（ブラック・ポット）、そいつもだめだったら豚小豚煮（チタリングズ）がいいとな」となっている。

米国でも英国でも調理方法はだいたい同じ様である。そんないなか庶民料理そのものを連想させる"Cracker Chidlings"、つまり「南部いなかモツ煮込み」なる泥くさいルポルタージュ風というか噂話しのごった煮の中に、都会人のPerkinsは何を嗅ぎつけたのだろうか。『マックス＆マージョリ——パーキンズ＝ローリングズ書簡集』（*Max & Marjorie: The Correspondence between Maxwell E. Perkins and Marjorie Kinnan Rawlings*, 1999）の編者Roger L. Tarrによると、1930年～1947年の17年間に、両者が交した書簡、短信、電報は698通にのぼり、他の作家とのやり取りに比べると異例中の異例であるという[(5)]。両者の隔たりはおおきく、片や「洗練された都会の編集者」、片や都会ぐらしがきらいな「泥くさい田舎のオレンヂ農園主」である。始めは駆けだし作家と編集者であったのが、やがて作家の'mentor'つまりすぐれた助言者となり、友となった。「メンター」とは、ギリシア伝説に登場する「メントール」（Méntōr）で、さかのぼるとサンスクリット語のman-tár-'one who thinks'にゆきつく。賢い助言者、教育者である。Scott Fitzgeraldが、「ぼくの知的良心はエドマンド・ウィルソンで、詩的良心はジョン・ピール・ビショップで」云々と言っていたのが思い出される。"Cracker Chidlings"から5年の歳月のあいだに、Perkinsとの手紙などのやり取りを経るうち、Rawlingsの中で、ここフロリダの'scrub'の林間でなにをなすべきか、作家魂が研ぎ澄まされていった。

## 見えない蛩音――1930 年代米国

第二次世界大戦勃発前年の1938年２月に刊行された*The Yearling*は、翌月にはBook-of-the-Month-Clubの３月の推薦図書に選定された。評判の物差しによく取り沙汰される同クラブは、米国最大の通販組織であり、1970年～ 75年には、「不要の旨を通知しないかぎり商品が定期的に会員に送付される」という仕組みを取ったり（*Random House*, 2nd Ed.）、1926年のクラブ創設から40年間に２億冊の図書を配本したというから(6)、この販売網にいったん乗ったらどれだけ知名度がつくのか、じゅうぶんに想像がつく。また、よく知られるように、翌1939年にはピュリツァー賞を受賞し、米国芸術院会員（American Academy of Arts and Letters）にも選ばれた。全会一致で推薦されたのは、まことに稀有なことであったそうだ(7)。

そうした好評・幸運の底の深層には、こんなことがあったのではないだろうか。Rawlingsからの*The Yearling*の戻りのゲラの到着を知らせる、Scribner's社の用箋にタイプした短信の後ろに、Perkinsは追伸を加えた。

> わたしにとってのThe Yearling〔ママ〕をずばりと申しあげます。寝床に入ると心配事がふうっとあたまに浮かぶこの頃です。けれどもそこから私のこころは、The Yearlingにむかってゆくのです――いなか、人びと、そして猟に。すると万事よし、となる。そこが良質な作品の良質のゆえんではないかと(8)。

寝床に入ると心配事がといっているのは、Perkins自身や周囲への個人的な憂慮などではなさそうだ。人びとの胸裏に暗雲を投じている憂慮すべき世情である。*The Yearling*を軸に、1930年代末から1950年代はじめにかけての米国、世界、日本をかんたんな年表で通覧すると以下のようになる。

| | 米国 | 世界と日本 | Rawlings |
|---|---|---|---|
| 1930年（34歳）（昭和５年） | | （独）失業者３百万人以上 | “Cracker Chidlings” をスクリブナーズ誌に投稿、翌年２月号に掲載、原稿料150ドル |
| 1931年（35歳）（昭和６年） | | （日）満州事変 | |
| 1932年（36歳）（昭和７年） | ４人に１人、千２百万人失業<br>ローズヴェルト第32代大統領就任<br>New Deal政策（～ 1939） | | |
| 1933年（37歳）（昭和８年） | | （独）３月、総選挙、ナチス第一党に | ３月、*South Moon Under*（月が天底にあるとき）刊行<br>７月、FL州北部中央Cross Creek森中、猟師Cal Longの家に起居 |
| 1934年（38歳）（昭和９年） | Great Plains（大草原地帯）、Dust Bowlと化し失業者３百万人が西へ移動 | （独）ヒトラー総統就任 | |
| 1935年（39歳）（昭和10年） | ８月、中立法（Neutrality Acts）制定（1935～37） | | |

| | | | |
|---|---|---|---|
| 1936年（40歳）<br>（昭和11年） | | （西）7月、スペイン内乱<br>独伊枢軸 | 9月、TN州境にちかいNC州北西部Banner Elk林中の山小屋で*The Yearling*執筆開始<br>5月、FL州南東沖合のビミニ諸島で「人なつっこく繊細で…おおきな手の」Hemingwayに会う<br>10月、NC州西部Ashvilleで落魄のFitzgeraldに会い、後日「わたしも32口径の銃に手を出したくなったことが何度かある」と書き送る |
| 1937年（41歳）<br>（昭和12年） | | 11月、日独伊防共協定<br>7月、日華事変 | 6月、NYでThomas Wolfeに会う |
| 1938年（42歳）<br>（昭和13年） | | （独）オーストリア併合 | 2月、*The Yearling*刊行<br>4月、映画化権をM-G-Mに3万ドルで*The Yearling*大ベストセラー |
| 1939年（43歳）<br>（昭和14年） | Steinbeck: *The Grapes of Wrath*（怒りの葡萄）<br>Einstein、ローズヴェルトに原爆製造のマンハッタン計画を進言 | 8月、独ソ不可侵条約<br>9月、（独）ポーランド侵攻<br>9月、世界大戦（～1945）<br>（独）ユダヤ人の衣服にyellow star of Davidを目印に付けさせる（黄色はユダヤ人の標識） | *The Yearling*ピュリッツァー賞 |
| 1940年（44歳）<br>（昭和15年） | ローズヴェルト異例の三選<br>Hemingway: *For Whom the Bell Tolls*（誰がために鐘は鳴る） | 日米通商航海条約失効<br>4月、（英）チャーチル戦時内閣、徹底抗戦の構え<br>7月、（独）ロンドン大空襲<br>独軍、オランダ、ベルギー、フランス、デンマーク、ノールウェイ、ルクセンブルグ侵攻 | 3月、短篇集*When the Whippoorwill*刊行<br>英人Kingsleyを主人公の小説の構想を断念 |
| 1941年（45歳）<br>（昭和16年） | 3月制定の武器貸与法（Lend-lease Act）で同盟国に軍需品、食糧、人員など援助開始 | 12月、（日）真珠湾攻撃、太平洋戦争 | M-G-M、Big Scrub森中でロケ開始<br>Rawlings、Cross CreekからFL州北東部St. Augustine（白人の北米最古の町）へ移転 |
| 1942年（46歳）<br>（昭和17年） | 2月、日系人収容（Internment of Japanese Americans）<br>8月、マンハッタン計画着手 | （独）ナチス強制収容所でユダヤ人大量殺戮（holocaust）<br>年末までに独U-boat "Wolf-packs" により撃沈された連合軍艦船1千隻以上 | 2月、*Cross Creek*刊行<br>Armed Services editionも刊行、世界各地で米軍人用に |
| 1943年（47歳）<br>（昭和18年） | | （独）スターリングラードの独軍降伏<br>（伊）伊軍降伏 | *Cross Creek*で実在の人物を実名で描いたため名誉棄損の訴訟5年におよぶ |
| 1944年（48歳）<br>（昭和19年） | 1月、ローズヴェルト四選 | 6月、米英加の連合軍ノルマンディ侵攻 | |
| 1945年（49歳）<br>（昭和20年） | 4月、ローズヴェルト歿<br>8月、日本に原爆投下 | 2月、連合軍ドレスデン空襲<br>2月、ヤルタ会談（ローズヴェルト、チャーチル、スターリン）<br>4月、ヒトラー、ベルリンで自決<br>7月26日、ポツダム宣言（ベルリン郊外ポツダム市での2週間におよぶ国際会議で米英ソ三国代表が独の処遇、日本の降伏条件を議し発表） | |
| 1947年（51歳）<br>（昭和22年） | | | 6月17日、三代目Charles Scribner（社長）から電報―「マックス二日間患イ今早朝肺炎デ逝去」 |
| 1952年（56歳）<br>（昭和27年） | アイゼンハワー大統領<br>11月、水爆実験 | （英）エリザベス2世即位 | 2月、Cross Creekで心臓発作<br>9月、カバヤ文庫版『子鹿物語』 |

| | | | |
|---|---|---|---|
| 1953年（57歳）<br>（昭和28年） | | 7月、朝鮮戦争休戦協定 | 2月、Ellen Glasgow伝執筆のため資料蒐集<br>12月14日、脳出血のためFL州St. Augustine南方10マイルのCrescent Beachで歿 |

世界的な不況下にあって、経済のカオスの淵から脱するために、強力な主導者の出現を待ち望んだのは、ドイツだけではなかった。ナショナリズムとか軍国主義とか中華主義の福音を人びとに説くのは、ヒトラーだけではない。イタリアにはBenito Mussoliniのファシズム、スペインには大戦の先駆を成すといわれる内乱、ロシアにはスターリンのコミュニズム、極東の日本には軍国主義が擡頭する、といった現代史はくり返すまでもない。FascismとNazismとCommunismを合計すると全体主義（totalitarianism）である。これが20世紀近代世界を破壊したウイルスである。追随してやまない日本などもふくめて西欧近代文明は、中世のあとの個人主義によって成立していたが、totalitarianismの（国の）中では、個人は問題にされないから、惨劇が生じた。

英国米国はそこのところを回避して、枢軸国の暴走を抑える側としての存在を示した。ヒトラーも一種世直しの指導者であったろうが、米国民の選択したF. D. Rooseveltは、全体主義の対極をゆく指導者である。それでも国内に内包する病魔は抑えがたく、欧州の病魔にもおとらない。欧州のねじれと呼応するかのように米国内に出現した諸勢力は、これもたいへんな繁殖力をもっていた。現在でも因子をうけついだ子孫が活動しているが、1930年代の大不況の時代にこそ出現の意味があった。K. K. K.だとかGerman American Bundだとか Father Coughlinだとかの人種右翼が、欧州のanti-Semitism（ユダヤ人排斥思想）と呼応して跳梁跋扈した。

さて不況の時代の中、スタインベックの『怒りの葡萄』にあるような飢え、栄養失調というのは、はげしい病気、病勢を示すものだ。いったんそうなると休憩しても滋養をとっても、もうもとに戻ることはない段階にあることは、ユニセフなどの人道支援活動の報告でよく強調されている。本邦の戦中戦後の飢餓についてはおびただしく語られ記録されているが、米国1930年代の惨状も、記憶されてしかるべきもので、オバマ大統領が2008年の勝利演説でふれたDust Bowlも Okiesもそれである。また、米国中に発生した貧民窟Hoovervilleも見落とすわけにはいかない。

> 大小の町々に軒並みあらわれた、漂流しないホームレスの人々は、10セントか15セント払って、シラミとネズミだらけの木賃宿で、小便くさいマットレスを床に敷いて眠った。その宿代もなければ（中略）橋のたもとだ。（中略）積極的な連中は、木片、ダンボール、看板、垣根等々、風と日射をふせげるものを見つけてきて、吹けば飛ぶような小屋をこしらえた。場所はたいてい郊外をもつ町の町はずれで、奇怪な村々が出現してへばりついた。フーヴァーヴィルズと称されたのは、大統領への愛着からではなかった(9)。

場所が郊外なのは、町々に黒人人口がふえて中心部がドーナッツ化現象をおこすより以前の状態であるからで、*Dictionary of American Slang*は、「ゴミ捨て場のちかくに」と説明している。おおくの国民は、不況に有効策を打てなかったHoover大統領失脚後に、「我々が怖れなくてはならない唯一のことは、怖れそのものである」と就任演説で直言したRooseveltに、荒波を乗りき

る指導者をみいだしたのだ。しかしNew Dealが国民の支持を得ながらも、３、４年たっても失業者は数百万人いた。1935年にはオクラホマ等の大草原地帯（Great Plains）に旱ばつと砂塵嵐がおこっていわゆるDust Bowlと化し、Okies、Arkies等の漂流農業難民が15万家族40万人以上も出現する。この実態を描写してSteinbeckは*The Grapes of Wrath*に、‘*Okies* use’ ta mean you was from Oklahoma. Now it means you're a dirty son-of-a-bitch.’（あのな、オーキーというのは昔はオクラホマ生まれという意味だったんだ。ところが今じゃきたねえクソタレ野郎という意味に使うんだよ。人間の屑のことをオーキーっていうんだ）(10)と書いた。*DARE*収録の1949 *Am Sp*（*American Speech*）24. 26は、‘*Okie* first became familiar during the great drought of 1936, when thousands of Oklahoma small farmers began scurrying out of the Dust Bowl... Most of them headed for California... In a little while *Okie* began to be used to designate any bankrupt and mendicant farmer.’（オーキーがはじめに知られるようになったのは、1936年の大旱ばつの時で、オクラホマの貧農が何千人もダスト・ボウルから慌てて逃げだした。…カリフォルニアに向かったのがほとんどだ。…じきに、乞食のような貧乏百姓なら皆オーキーと言われるようになった）(11)と実態を摘出している。ところがこうした現実に目を背け、あらぬ方向に目をやり耳をかたむける人々も出てきたのである。

New Dealは右からも左からも攻撃をうけた。保守主義者からは救済策の行き過ぎを批難され、左派の批評家からは不充分だと攻撃された。社会主義者、共産主義者は、Rooseveltの‘all-American team’（挙国一致政策）を冷笑した。右派について顕著な事例を述べてみよう。

そんなときにきまって出現するのが煽動家だ。煽動家‘demagogue’は、Gk dēmagōgós ‘leader of the people; leader of the mob’から来る。「煽」については言うまでもない。煽動でも扇動でもおなじ。学習辞典*OALD*（*Oxford Advanced Learner's Dictionary*）が‘to stir up the people’と説明するのに一致する。扇とかうちわは、火とともに出現しただろう。時期が時期であるだけに、米国にあまた登場したデマゴウグ＝煽動政治家の中でも、先刻名前をあげたカトリック神父Charles Edward Coughlin（1891～1979）は突出している。Rooseveltを‘great betrayal liar’（大叛逆者の大ウソつき）(12)と攻撃した。それ以前の1936年にはUnion Party（労働党）創始にかかわり、lower-middle-classの支持を受けたが、やがて反ユダヤ（anti-Semitic）支持へ、ファシスト運動（Pro-Fascist）へと傾斜してゆく。1930年代後半、German-American Volksbundというのがあって、Bundは「同盟」だから「親独協会」だ。なるほどCoughlinはその親独協会の中心人物で、‘Golden Hour of the Little Flower’というラジオ放送を、毎週デトロイト北方の教会から流した。1870年代に建てられた‘National Shrine of the Little Flower’という教会である。4千500万人の聴取者がいたというこのラジオ番組は、教会の塔からの放送でありCBSラジオ放送網に乗った。南部から発した、説教師による熱狂的な「キャンプ・ミーティング」の流れをくみとるべきだろう。なぜなら‘radio spellbinder’ともよばれ、spellbindは「呪文でしばる」だが、spell「呪文」の元々は、「話し、言葉」であった。gospel「福音」の語源god ‘good’ + spell ‘tidings’の第二要素と同源である。ことばというか魔法というか、Coughlinの説法はよほどの浸透力だったのだろう。1940 G. Marx *Let*. 12 June (1967) 21 I'm not able to sleep... I see Bund members dropping down my chimney, Commies under my bed.（眠れない…同盟のメンバーが煙突から降りてくる。共産党員がベッドの下に。）などというのが*OED*のBundの項目のこの時期の例文

にある。親独協会の首領が説教放送で、ニューディールは共産主義者の陰謀だなどと大統領に敵意をむき出しにするのである。

富の再配分を主唱するUnion Partyの創始にかかわったそうだが、上述のように右傾化し、1942年にカトリック当局から放送を止められると、米国の参戦を批難した。そのような流れは、今日までも、しばらく以前のルイジアナ州知事選などで脚光をあびたDavid Dukeなどにつながってきていると思われる。

もう一人のおおきなデマゴウグは、ルイジアナ州知事から1933年に連邦上院に乗り込み、‘Share Our Wealth’を提唱したHuey Long（1893 ～ 1935）だ。Great Depressionに終止符を打つには、この政策によって、百万ドルを超える私有財産は没収、これを再配分してすべての家族に年収２千ドルを保障するというものだ。1935年にはこれに賛同するShare-Our-Wealthクラブの会員が460万人に達し、Longは大統領選に出馬したが、1935年、州議会議事堂階段で撃たれ暗殺された。

CoughlinやLongは、ニューディール期に出たおおくのデマゴウグの典型で、「奇矯な言動と相まって大衆的人気を得た」のである[13]。Longの「提案した社会政策は、（中略）大衆の要望をある程度反映しており、ニューディール後期のローズヴェルト大統領の社会福祉政策を刺激する」[14]という効果はあったようだ。

さて*The Yearling*だが、舞台も19世紀後半におかれているし、作中に作者Rawlingsの同時代社会はまずすがたを見せない。けれどもこの小説を掌中にするその頃の読者の日常には、やまない不況の嵐が吹きすさんで、ときには上述のように軍靴のひびきの予感すらただよう。そんな暗雲垂れ込めた中だから、この森の中の一年のものがたりのidyllicさが、なおさら胸打つのではなかろうか。そこのところを、炯らかな眼で見抜く編集者Perkinsが、作者への短信にしたためたのではなかったか。Rawlingsは、先刻のスイタンベックのように、時代に鋭敏に反応するタイプではない。時計を半世紀捲きもどし田園牧歌的な開拓絵巻を描く手腕は、見事というほかない。Perkinsが並々ならぬ才能を嗅ぎ取ったのは、Rawlingsが現実ばなれしていて古典的である点ではなかったろうか。

## 読んだか？　観たか？――怪しげな記憶

ふたたび個人的な体験をすこし書き連ねる。

昭和30年代、小学生から中学生時分に、母親につれられて岡山市に買いものや映画を観にゆく好運が、１年に一度ぐらいあった。映画を観にゆくのは、小学校の巡回映画がもうあまり行なわれなくなったあとだったと記憶する。岡山市で観た中に、「子鹿物語」があったかなかったかおぼえていない。その頃アメリカ製の連続もののテレビドラマが急激にお茶の間に入りこんでゆくが、その中にはたぶん入っていなかったと思う。どこでいつ観たのか聴いたのか、読んだのか読んでもらったのか、はっきり記憶はないのに、はなしの筋も少年の顔付きも、光景もいつの間にか知っているのは、ふしぎな事である。そのくらいにこの時代は、キャラメルやチョコレートとともに、アメリカ製大衆文化が都会と地方の時間差をともないながら、津津浦浦に燎原のいき

おいで流れていった。

かりに、自分で読んだか家庭や幼稚園や小学校で読んでもらったかしたのであれば、どんな本であったろうか。名作が、付録でついていたという、小学館の『小学〇年生』で取り上げたかも知れないが、いなか町の本屋の店さきでちょっと目に止まるだけで、それ以上に興味はわかなかった。昭和28年頃からさかんに刊行が始まった「世界少年少女文学全集」のたぐいには、なん回も収録されているから、きっと身の廻りにあったにちがいない。身の廻りにたしかになかったのは、「カバヤ文庫」の「子鹿物語」で、わたしの家と懇意な近隣の大工の「棟梁」のむすこさんが、カバヤ食品につとめていたものだから、キャラメルなどお菓子はしょっ中もらっていたのに、文庫の方を知らなかったなんて、と、今頃悔やんでいる。坪内稔典『おまけの名作―カバヤ文庫物語』によると、＜カバヤキャラメルの中に入っている文庫券をためれば、あなたのすきなどの本でもさしあげます＞というのが「カバヤ文庫」で、50点で文庫一冊になった。抜け目のないトム・ソーヤーが日曜学校で名誉を得、賞品の聖書をもらうのも、友だちを買収して＜券＝カード＞を不正取得したのだった。

カバヤ文庫は昭和27年から29年まで、ほぼ毎週新作を刊行し合計133冊をだしている。その中の第二巻第六冊目が、（原作著）ローリングス（ママ）「子鹿物語」、（序文筆者）加藤一郎で、昭和27年９月14日が発行年月日だ。その時わたしは生後２ヵ月にもならない赤子なので、カバヤ文庫の「子鹿物語」には出あうはずもない。

カバヤ文庫のタイトル全般を見わたすと「序文筆者」には、中西信太郎、今西錦司、新村出、田中秀央、野上弥生子、呉茂一、野上素一、市河三喜、福原麟太郎、吉田健一、朱牟田夏雄等々、若き日の錚々たる学者、作家が名を連ねているが、児童用文庫にするためのリライトは坪内によると、「京都の大学院生や高校教師などによって行われた」(15)という。「子鹿物語」の筆をとった加藤一郎氏がどなたか定かではないが、「スピリ少年少女文学全集」５（白水社、1961）やシュティフター『男やもめ―他一編』（岩波書店、1952）などの訳者の独文学者の加藤一郎氏ではないかと思われる。スピリはヨハンナ・シュピリ（Johanna Spyri）で、「アルプスの少女ハイジ」の作者である。

さて、おとなになったわたしは、映画館でThe Yearlingというか「子鹿物語」を観ていない。10年ぐらい前から手もとにあるのは＜Warner Bros.〔Brothers〕Family Entertainment＞のビデオテープで、ジャケットには“A remarkable film that is truly for the entire family”（家族みんながたのしめる驚くべき名画）とかの宣伝文句、開拓生活の困難と苦闘の中からジョディ・バクスターは――、とかのものがたり紹介のほかに、最下部に芥子粒のような字で版権にかんすることが記してある。曰く、「©1946 Turner Entertainment Co.,（中略）Academy Awards®はAcademy of Motion Picture Arts and Sciencesの登録商標、カラー／128分」、云々。

もう一つ、手もとにはないが私の住む埼玉県入間市市立図書館がビデオテープ「子鹿物語」を所蔵している。その宣伝文には同様のことが記されていて、1946年製作のもののビデオ版に日本語字幕（佐藤一公による）がついたもの。Package Design ©1993 MGM / US Home Video, Inc. and Turner Entertainment Co. とあるから、字幕付きビデオは1993年発行と思われ現在入手困難である。

## 二つの映画 *Ur*-The Yearling（1941）と The Yearling（1946）

わたしの観たビデオの元になっている映画（©1946 Turner Entertainment Co.）が完成版 The Yearlingなのだけれど、それの完成には想像を超える年月と困難があったことを知った。映画The Yearlingについて何事か探りたくなって、平成25年春、東京国立近代美術館フィルムセンターに何度か通った。（そのような映画の資料館があるらしいことは、ずいぶん昔に長塚節の小説『土』を映画化したものが、相模原のどこかに映画フィルムを大量に保管してある中にあるという新聞記事をよんだことがあったので、知るに至った。）そこで入手した*New York Times Encyclopedia of Film*（ニューヨーク・タイムズ映画百科誌）などの複写資料をよんだところ、いわば*Ur*-The Yearling（原子鹿物語）にあたるものがあった、あるいは制作していたことをはじめて知り、おどろきを隠せなかった。制作過程でこらした歴史的考証、時代考証は、computer graphicsで制作する今日の万事安あがりの映画制作との隔絶を感じる。1939年２月に原作が刊行されると、４月にM-G-Mが３万ドルで映画化権を買ったことは、年表にすでに書いた。そのすぐあとに同社の撮影隊が、原作の中心核をなすフロリダ半島北部中央の、Ocala National Forestでのロケ地選定のため、原作者Rawlingsに立ち会いと助言を求めている。原作でも映画でも、単に舞台とか背景とかという以上の自然の存在が、この森林である。アイルランドの森から妖精や小人が出てきたように、ここから開拓農民のものがたりやスペイン人のおばけが出てくる。

翌1940年中頃には、制作・撮影の段取りになっていた。大自然の中の格闘、大自然との格闘を描く文芸映画というのは、撮影所の中のセットあるいはオープンセットでならまだしも、ロケーション撮影でやると、制作がそもそも困難なのかも知れない。たとえばJohn Huston監督、Gregory Peck主演のMelville原作「白鯨」（Moby-dick、1956）なども（原作は1851年刊）、大西洋モロッコ沖合の捕鯨基地のあるマデリア諸島（ポルトガル領）とかカナリア諸島で本物の捕鯨を撮影したり、かつて世界一の捕鯨基地であったマサチューセッツ州ニュー・ベッドフォードのシーンは、アイルランド南西部コーク州の海港Youghalで撮ったり、ゴム製の「白鯨」は英国のダンロップ社の製作で、60、70フィートもあり浮くのに大量の圧搾空気を要し、制作費は４百万ドル以上もかかったそうだ。

これほどに往時の制作スケールはちがっていた。The Yearling制作のそこいらへんのことを、*New York Times Encyclopedia of Film*などの資料を元に申し述べれば、当時の映画産業のみならずそれを可能にした米国の、今日とおおきく異なる社会事情も、おのずから明らかになってくるのではないかと思う。

## 「＜子鹿＞ふたたび故地をさまよう」

*New York Times Encyclopedia of Film*は、1896 ～ 1979年に至る*New York Times*映画関連記事のファクシミリ版をリプリント集成したもので、時代順の記事の配列で映画史を通覧できるしくみになっており、最終第13巻は、総索引になっている。（これらは複写版であり、その版づらからすると元のものは*New York Times Book Review*のように、本セクションから独立した

ページ仕立てのものであったと思われる。）その1941年５月25日付の“‘The Yearling’ Again Roams Its Native Haunts”（＜子鹿＞ふたたび故地をさまよう）の記事は、映画The Yearlingの制作史を一挙に明らめて蒙を啓かれる思いがする。

シェイクスピアの*Hamlet*の原拠が、デンマーク中世伝説にあるというよりも、同時代の劇作家Thomas Kyd作の劇にあるのは*Hamlet*研究史に明らかで、*Ur-Hamlet*（原ハムレット）と通例称されているが、その*Ur-*じたいは今日に伝わっていないそうだ。（*ur-*は、Urbild「原型」、Urgroßvater「曾祖父」のように用いる独語の接頭辞。）それに比べると映画*Ur-*The Yearlingの方は、先刻書いたとおり、記録が残っていることに目を瞠る。以下、年代をおって「原」（Ur-）から「正典」（Canon）の完成・公開への道程を、*New York Times Encyclopedia of Film*や*American Film Institute Catalog of Motion Pictures Produced in the United States*（米国映画協会映画目録）などの記事をもにと略述する。

今日に伝わっているMetro-Goldwin-Mayer株式会社制作、Loew’s Inc.管理配給のClarence Brown監督作品は、1946年12月にロサンゼルスの映画館Carthay Circle Theatreで特別封切された。ここは1969年に取り壊されているが、ハリウッド黄金時代の1926年に開業し、‘The Showplace of the Golden West’[16]とも言われ、‘once a favorite spot for movie premieres’（大人気の封切館）[17]であったそうだ。「白雪姫と七人の小人」「風とともに去りぬ」などの興業もここから始まった。さて、The Yearlingは予定より一ヵ月おくれでニューヨーク開演、さらに特定劇場でのロードショー公開をへて、1947年５月に一般公開された。手元のビデオおよび先刻の「映画協会映画目録」に拠って、映画冒頭のcredit titleを概略しめすと――、

〔制作〕Sidney Franklin
〔監督〕Clarence Brown
〔脚本〕Paul Osborn
〔撮影監督〕Charles Rosher, Leonard Smith, Arthur Arling
〔テクニカラー監督〕Natalie Kalmus
〔美術監督〕Cedric Gibbons, Paul Grosse
〔フィルム編集〕Harold F. Kress
〔楽譜〕Herbert Stothart
〔技術指導〕Mel Long

| | | |
|---|---|---|
| 〔配役〕 | Gregory Peck（Penny Baxter / Pa Baxter） | 入植したバクスター家の30歳代の若き当主 |
| | Jane Wyman（Orry Baxter / Ma Baxter） | その妻 |
| | Claude Jarman, Jr.（Jody） | 上の子どもが皆死んだあとの一人むすこ |
| | Chill Willis（Buck Forrester） | フォレスター家の次男 |
| | Clem Bevass（Pa Forrester） | 荒くれフォスター兄弟の老父 |
| | Margaret Wychery（Ma Forrester） | フォレスター兄弟の母 |
| | Henry Travers（Mr. Boyles） | 雑貨屋店主 |
| | Forrest Tucker（Lem Forrester） | フォレスター兄弟いちのならず者 |

Donn Gift（Fodderwing）　　フォレスター兄弟末弟の障害児でJodyの親友

これらの布陣は錚々たるものだが、このたびはなぜ完成公開への道が拓けたのだろうか。その５年前、1941年のM-G-Mの最意欲作品になるはずだった*Ur*-The Yearlingの布陣のおもだったところを一覧すると――、

〔監督〕Victor Fleming
〔特定ばめん撮影監督〕Victor Fleming、同助監督：Richard Rosson
〔撮影監督〕〔カメラ〕Hal Rosson
〔技術指南〕Mel Long
〔配役〕 Spencer Tracy
Anne Revere
Gene Eckman

と、1946年のとは九分五厘ちがっている。以下「原（ウア）」から「正典（キヤノン）」への推移を、年月日をたどって追ってゆく。

1938年４月　M-G-M（Rawlingsから）映画化権購入。
この直後頃、Rawlingsの助力を得てOcala National Forestでロケ地選定。

1940年中頃　この頃制作開始予定で、フロリダの農場を賃借、作物植つけ。しかしJody役は見つからず、撮影開始延期。

1941年　１年おくれで（時期詳細不明）上記Spencer Tracy他の配役で撮影開始。他の配役は、Adeline deWalt Reynolds（Ma Forrester）、Tully Marshall（Pa Forrester）、ほか。
６月、Fleming監督撤退、King Vidorが代行に投入されるが、制作の救済不可能を表明。
初秋頃、制作上の様ざまな困難生じ、「会社のために」撮影無期延期に。すでに予算100万ドルの半分使用。

1942年２月　Roddy McDowallのオーディション完了（子役らしい）、撮影再開の目途。しかし撮影はすべて撮影所で行う予定。再度Spencer Tracy主演予定、監督Sidney Franklinの可能性。しかし結局Franklin監督、実現せず。

1944年　11月、1945年春に再開の報道あり。
監督Clarence Brown、カメラLeonard Smithを予定。
Ocala National Forestで撮影したオリジナル・フィルムの多くを救出し追加撮影もする。
配役の変更
Spencer Tracy → G. Peck
Gene Eckman → Tommy Leeを1945年１月、スクリーンテスト。

EckmanはJody役には大きくなりすぎた。
結局、Claude Jarman, Jr.に。

1945年　Ocala Silver Springsでシークエンス撮影開始。（Marion郡中の30～40箇所）
夏、役者の芝居ばめん撮影。
Ma Baxter役はJacqueline Whiteに。
８月下旬、撮影中断。
９月中旬、Whiteに代ってJane Wyman（＝ Ma Baxter）で再開。
10月、CA州Lake Arrowheadでのロケ。撮影終了後、追加撮影はCulver City（LAダウンタウン西）M-G-M撮影所で。11月初旬、別仕立ての撮影隊、Silver Springs（FL州）再訪、カメラ＝ Charles Rosher。

とにかく、長期にわたり、多難な制作であった。1941年の「原」の方では、およそ300人の撮影隊を擁した。様々な難事が矢継ぎ早に起こって中止にならざるを得なかった様だが、大規模になりすぎ、意欲が突っ走っておさまりがつかなくなった感がある。ハリウッド映画が絶頂の時期だが、原作の舞台で撮影する最初の映画であったそうだ。その辺から生じた困難事情を、“Them Hollywood　Nuts”（あのハリウッドのキ印連が）と*Liberty*誌が書いている（1946年11月号）と*American Film Institute Catalog*が紹介している。念のため辞書のnut(s)の説明等を２、３記しておく。

*Dictionary of American Slang*では――、

A person fanatically enthusiastic about a particular activity, esp. about a sport; *n. pl.*〔taboo〕The testicles. *Very Common*.
（特定の事柄、とくにスポーツに熱狂的な人〔名詞、複数で〕タブー語で睾丸の意によく使用）

*Webster*第*3*版では――、

*Slang*　（1）eccentric「風変りな」
〈a *nut* got into the ... reception and started screaming obscenities〉
（キ印が受付に来て卑猥なことを叫びはじめた）
（2）one who is or seems to be mentally unbalanced.
（精神的バランスのとれていない人）
（3）one who is overwhelming about a particular matter.
（特定なことになると止まらなくなる人）

要するに撮影は、「あのハリウッドのクレージー野郎どもが、キンタマ野郎どもが」と、そう雑誌に書かれてもおかしくないぐらいの狂躁ぶり、大騒動だったということだ。

その「クレージー野郎、キンタマ野郎ども」が右往左往した、ロケ地で原作の舞台であるOcala National ForestのOcalaは、〔oukǽlə/oh-KAL-a〕と発音する。近隣のインディアン部落にいたOcaliという酋長からきて、意味するところは‘fair land’だとか‘big hammock’だとか定かでない[18]。現在Marion郡郡庁所在地である。作中に“Baxter Island”など、～Islandというのが出て来るのが、この大森林の大きな特徴である。このForestを訪れた自然保護作家Bill

Bellevilleによると、これは、an“island”is not surrounded by water, but instead is a fertile, cooler hammock of long-leaf〔pine〕, wire-grass, and tunkey oak *in a virtual sea of rolling*, arid scrub.（「島」は周囲が湖沼なのではなく、ひんやりする肥沃な台地でハモックとよばれ、大王松、ワイアーグラス（イネ科雑草）、トルコ楢（なら）が茂り、周囲には乾燥した矮樹林が海原のごとくひろがっている）(19)。Rawlingsが作品第二章で、‘He had bought of the Forresters... high good land in the center of a pine island.’（ペニーがフォレスター家から買ったのは、マツの樹島の中心にある高台で）(20)と描く箇所などは、この独特の「松島」の水彩画を見る思いがする。*DARE*は、A grove or dump of trees surrounded by prairie or scrub（プレーリーや矮樹林に囲まれた樹林）と説明し、*The Yearling*のこの箇所を用例に掲げている。

はなしをロケにもどす。Rawlings以前にこのようなOcala National Forrestに足をふみ込んだのは、狩猟きちがいか釣りきちがいしかいなかったようだ。そこに1940年頃から、狩猟きちがいや釣りきちがいではない、「あのハリウッドのキ印連中」がやってきた。三部屋のキャビン、粘土の煙突、丸太を半分にたて割りにした畑の柵など、あらゆるものを忠実に再現したのは大道具担当者にちがいない。“I *shore* would like to live there.”（ここに住みてぇなァ）、“*Hit's* the finest home on the island.”（＜島＞でさいこうの住処（すみか）ぜよう）(21)―そうscrub住人の若ものがつぶやいたということは、1940年代には、もはや開拓時代のおもかげは僻村にもとどめていなかったわけだ。映画（ビデオ）の出だしのtitle creditには見つけることはできないが、technical adviserの73歳のscrub住人Mel Longによるところ大で、大道具すべてを立ち会って検分したという。（この名前から、Rawlingsが寄寓し*The Yearling*創作の源泉となったCal Longの係累ではないかと想像せざるを得ないが、今はなんの確証もない。）

西隣り、現在４万人強のOcalaの町の当時の人口は１万２千で、町の内外のそこここに４大隊の撮影隊と40トンの機材と「キラ星のごときスターの群れ」(22)がやって来たのだから、田舎町はひっくりかえったことだろう。‘that movie crowd’――あの映画の連中は、と町の人々が言う撮影隊や俳優は、ゆったりしたズボンとシャツ姿でモカシンをはき、日よけ帽（サン・ヘルメット）すがたで目立った。主役Spencer Tracyのホテルにはエア・コンディショニング装置が付いたのも町の住人の注意を引いた。これも制作費高騰の要因の一つだろう。

急にいなか町の人口がふくれ上がったわけで、ホテルやキャンプ場には‘no vacancy’（満室）の札が立った。信号機４つの町にハリウッドのステーション・ワゴンがゆきかう。Ocala-Deland間およそ10マイルにははじめての舗装道路が１本出現した。今では山中や林中のどこにでも見かける‘Look Out for Deer’の道路標識が立ったのは、都会の部外者がやってきたからだ。じっさいわたしも2006年初秋にWV州の山中に自動車をすすめていて、標識があるなと思ったら道ばたにdeerが倒れていたのを思い出す。Ocalaの人々は*The Yearling*の頃、つまり開拓時代末期とあまりかわらぬ気風で、かつてのスコットランド高地や島嶼（とうしょ）部の辺境部族（clan）のように、外界と接触のない人々であった。

1941年に撮影が開始されたが秋には制作上の様々な困難が生じて云々と先刻書いたのは、今日の映画制作とはかけ離れた困難が実際に生じたのだ。それでも途絶えながらも撮影制作が進んでゆき、ハリウッドの古典映画となったのはなぜだろうと思う。乾期がながく撮影のためのコーン畑の成長がおくれる。雨期で中断する。強風で録音がおくれる。車輌が砂にはまる等々、亜熱

帯地域ならではの支障が生じた。

そんなScrub Country（矮樹林地域）のはずれで作家業と半ちゃんでオレンジ農場をいとなむRawlingsは、映画も原作におとらぬものになりそうだと感懐をもらしている。Spencer Tracyの主役への配役をよろこび、Fleming監督の手腕もRawlingsには印象ぶかかった。Spencer Tracy（1900 ～ 67）は、容貌は十人並み、小柄でずんぐりしていて、性格俳優として頭角をあらわした。1937年「我は海の子」、38年「少年の町」でアカデミー主演男優賞を受賞、主要作品に50年の「花嫁の父」、58年「老人と海」、67年「招かれざる客」などがある。1942年「女性No.1」（Woman of the Year）から９本の共演作で名コンビぶりを発揮し妻ともなったキャサリン・ヘップバーンはTracyについて、「古い樫の木のような人、あるいは夏のような、風のような人、男が男だった時代の人」[23]と語っていることからしても、RawlingsがTracy主役をよろこんだのが、納得がゆく。この*Ur*-The Yearlingが完成に到らなかったのが惜しまれる。

スペンサー・トレイシー
Spencer Tracy（1900-1967）

RawlingsはJody役のGene Eckmanに会うと抱きしめて、‘You Are Jody!’（ほんとにジョディだわ！）と言ったそうだ。そのJody役の募集の経緯にまた興味をそそられるのは、ミーハー趣味というものだろうか。スクリーンテストをうけた15万人の中から選ばれたというから、おどろくほかない。その時11歳だったろうか、Gene Eckmanの身長は４フィート６インチ、体重76ポンド、すなわちおよそ137.2センチ、34.5キログラム。からだはか細くて亜麻色のながい髪をしていた。はだしで汚ならしく、灰色のズボンのすそをまくりあげているのは、こういう場合の親のしわざにちがいない。M-G-Mのだれがスクリーンテストをおこなったかなど不明だが、要するに‘a perfect cracker type’であったという。その兄弟のHarold Eckmanも、代役というか、なにかの際の替え玉ということになった。Eckmanは映画のしごとが気に入り、ピアニストになる夢は捨てた。

その他は、‘Ma Baxter’がAnn Revere、‘Ma Forrester’がAdeline deWalt Reynolds、‘Pa Forrester’がTully Marshallというのがおもな配役であった。先刻のべたようにおよそ3百人の撮影隊がうごき出したのであったが、その２ヵ月後には撮影は棚あげとなった。制作上の困難

のほかに、なにがあったのかよく分らない。会社のために中断したという以外、M-G-Mから公式の説明はなされなかった。棚あげはEckmanが役に適さないからとか、Spencer TracyとFlemingとのあいだに口論があったからとか言われたようだが、情報の出どころが‘rumored in some contemporary news items’（当時の記事にある噂では）とか‘others reported...’（ほかの記事では…）[24]というのは、芸能ゴシップ誌かなにかだろうか。今特定して理由がどこにあるのか明らかにすることはできない。その後は、すでに年代を追って示したようにThe Yearlingの制作は転変したわけだが、すでに紙数がつきたので正典The Yearlingの成立や評価については次稿に譲る。

**註**

（1）Gordon E. Bigelow, *Frontier Eden: The Literary Career of Marjorie Kinnan Rawlings* (Univ. of Florida Press, 1966; 6th printing, 1989), p.7.
（2）Paul S. Boyer, et al., *The Enduring Vision: A History of the American People*, Concise 6th ed., vol.2 From 1865 (Wadsworth, Cengage Learning, 2010), p.663.
（3）Bigelow, p.9.
（4）R. I. マクディヴィッド Jr. / 長井善見訳編『アメリカの方言――研究と展望』（南雲堂、1975）、p.154.
（5）Roger L. Tarr, ed., *Max & Marjorie: The Correspondence between Maxwell E. Perkins and Marjorie Kinnan Rawlings* (Univ. of Florida Press, 1999), p.1.
（6）*Encyclopedia Britannica* online. Book-of-the-Month-Clubの項目。
（7）Tarr, p.455.
（8）Tarr, p.324.
（9）T. H. Watkins, *The Great Depressions: America in the 1930s* (Back Bay Books, 1993), p.61.
（10）John Steinbeck, *The Grapes of Wrath* (Penguin Books, 1980), p.225(chap.18). 野崎孝訳『怒りのぶどう』（集英社、1975）。
（11）*DARE*, Okieの項目。
（12）Eric Foner and John A. Garrathy, eds., *The Reader's Companion to American History* (Houghton Mifflin, 1991). Coughlinの項目。
（13）斎藤真他監修『アメリカを知る事典』（平凡社、1986）、p.571.
（14）松村赳、富田虎男編著『英米史辞典』（研究者、2000）、Longの項目。
（15）坪内稔典『おまけの名作――カバヤ文庫物語』（いんてる社、1984）、p.22.
（16）https//www.laconservancy.org/locations/carthay-circle-theatre-demolished (03/15/2015)
（17）“A Diner With a Past And an Uncertain Future”: [Web Log] Cieply, Michael. *New York Times*, Late Edition (East Coast) [New York, N.Y.] 17 Oct 2011:B.6.
（18）John Perry Morris, *Florida Place Names* (Pineapple Press, Inc., 2011).
（19）Bill Belleville, *Salvaging the Real Florida: Lost and Found in the State of Dreams* (Univ. Press of Florida, 2011), p.248.
（20）Marjorie Kinnan Rawlings, *The Yearling* (Aladdin Classics, 2001), p.23. 土屋京子訳『鹿と少年（上）』（光文社古典新訳文庫、2008）、p.38.
（21）Dora Byron, “‘The Yearling’ Again Roams Its Native Haunts” *New York Times Encyclopedia of Film*, May 25, 1941.
（22）Ibid.
（23）*International Dictionary of Film and Filmmakers: Actors and Actresses*, 4th, ed. (St. James Press, 2000), pp.1209-1210.『外国映画俳優録 男優編 Illustrated Who's Who of World Cinema Vol.2: Actors』（キネマ旬報社、1988、1993、５刷）、pp.340-41.

(24) *American Film Institute Catalog of Motion Pictures Produced in the United States: Feature Films, 1941-1950* (Univ. of California Press, 1999), pp.2841-42.

**図版出展**

p.114　デイヴィッド・クィンラン『クィンラン版 世界映画俳優大事典』(講談社、2002)、p.684.

**主要参考文献**

Cassidy, Frederick G., chief editor. *Dictionary of American Regional English*, vol. Ⅲ. The Belknap Press of Harvard Univ. Pr. 1996.
Hardy, Thomas. *Tess of the D'Urbervilles*. Macmillan. 1974.
*Oxford English Dictionary*.
Purvis, Thomas L. *A Dictionary of American History*. Blackwell Publishers. 1999.
Rawlings, Marjorie Kinnan. *Short Stories by Marjorie Kinnan Rawlings*. Univ. of Florida Pr. 1994.
———. *The Yearling*. Aladdin Paperbacks. 2001.
Wright, Joseph. *The English Dialect Dictionary*, 6 vols. Oxford Univ. Pr. 1898-1905.

藤井健三『文学作品にみるアメリカ南部方言の語法』三修社、1984
R. I. マクデイヴィッドJr.『アメリカの方言―研究と展望』南雲堂、1975
坪内稔典『おまけの名作―カバヤ文庫物語』いんてる社、1984

Brown, Gene, ed. *The New York Times Encyclopedia of Film*, 13 vols. New York: Times Books. c. 1984.
*American Film Institute Catalog of Motion Pictures Produced in the United States: Feature Films, 1941-1950*. Univ. of California Pr. 1999.
『ビデオソフト完全カタログ1994　ビデオでーた特別編集　映画・TV＆ドラマ』角川書店、1994
『外国映画俳優全集・男優編　Illustrated Who's Who of World Cinema, vol.2: Actors』キネマ旬報社、1988

**付記**

註(21)～(24)および参考文献最後尾の4点は、東京国立近代美術館フィルムセンター収蔵の資料であり、同センター図書室で閲覧し、丁寧な複写を頂いた。また、平成25年3月26日には、「子鹿物語」(1946年)のスチールとポスターを岡田秀則主任研究員の配慮により拝見させて頂いた。併せて厚く御礼申し上げる。